

2016年6月13日

## 札幌チャレラジオ通信 第23回

加納：はい、三角山放送曲をお聞きのみなさん、こんにちは。月曜日午後3時、札幌チャレラジオ通信の時間でございます。私は今日のパーソナリティをします。札幌チャレンジの加納です。今日は私と岡野さんでお送りします。岡野さん、こんにちは。

岡野：はい、こんにちは。よろしくお願いします。

加納：よろしくお願いします。

毎回、この番組はゲストを生でお迎えしているんですが。

今日はゲストの方が来られていません、実は先週6月7日に、収録をさせていただいたんですよ。

今日は、私たちはここではほとんど待機のような形になっています。

先週のその収録の内容を聞いていただきながらお届けしたいと思っております。

今日の放送のゲストは岡野さん、どなたでしょうか？

岡野：はい、北海学園大学法学部教授の樽見弘紀さんです。

加納：樽見さんはですね、北海学園大学の法学部の先生なんですけれども。元々、テレビ局の仕事なんかもされていたりとか、根っからの学者っていうよりは、どちらかと言うとビジネスの世界にもおられた方です。

今は北海学園大学におられ、札幌チャレンジとは設立の頃からお付き合いがあり、

樽見さんとのトークを通して、番組をお伝えしていきたいと思います。

樽見さんとのトークの前半が終わりましたら、樽見さんのリクエスト曲、スピッツの「稲穂」をかけ、その後CMが入って後半の部分をお願いいたします。

15時28分、29分ごろ、またこのスタジオからお届けしたいと思います。では樽見さんとのトークをお聞きください。

—【録音】—

加納：はい、岡野さんそれでは。

岡野：はい。

加納：今日のゲストの樽見さん、こんにちは。

岡野：よろしくお願いします。

樽見：こんにちは、どうも。よろしくお願いします。

加納：はい、今日は事前の収録ということでお忙しい中、本当に来ていただいてありがとうございます。

樽見：いえ、とんでもないです。こちらこそ呼んでいただきましてありがとうございます。

加納：早速ですが、樽見さんとのトークをしていきたいと思いますが。

樽見：はい。

加納：樽見さんは札幌チャレンジドとの縁が非常に長くて、私よりも実はね、札幌チャレ歴が長いということをお話して驚いていたんですが。

樽見さん、札幌チャレとの出会いを少しですね、私も知らないことがあるようなので。

あはは（笑い）。

樽見：加納さん今代表でいらっしゃるんですけども。

その前に2人代表がおられて。共同代表であった時代。

その2人の代表と一緒に、すすきの近くの、最初イタリアレストランだったかなあ。その後ホテルのバーに移って。連チャンですね。

そういう札幌チャレンジドみたいな団体があったらいいねっていう企画会議を開いたんですね。

加納/岡野：ほう。うーん。

樽見：私は主体的に関わったわけじゃないんですが、たまたまその場に居合わせたという。

加納：誰かがお知り合いがおられて、お声掛けがあったんですね。

樽見：はい、杉山代表だとか、その前の森田代表。

加納：森田さん。

樽見：両方ともゆるく薄く付き合いがあったということですね。といっても、1999年に札幌に来たばかりで。まあ札幌もわからない。NPO業界もわからない。

大学のこともよく知らないという時代でしたので。全て見ることも聞くことも、楽しくてしづがなかった時代です。

加納：へえー。

樽見：で、やっぱり札幌すごいなあと、そう人たちいらっしゃるんだなあと。わくわくしながら遠巻きに、その会に参加していたその一人だったんですね。

加納：そうですね。それからすぐ、2000年の5月に正式に札チャレが立ち上がって。いろんな取り組みを少しずつですけれど、やっている中で。多分2002年とか3年ぐらいだったと思ったんですけども。

総務省の情報通信月間という月間があって、その企画として大学のパソコン講習会場を借りて、そこに障がい者の方が来て、大学の学生ボランティアさんにも手伝ってもらって、まあ結構多い、30人、40人ぐらいで、みんなでインターネットとかパソコンを勉強しようという企画をつくり、北海学園さんに樽見さんがおられたんで。

「会場として使わせてもらえないでしょうか」って言って。あれが具体的なアクションですよな？

樽見：そうですね。ご存じのように北海学園は札幌駅から地下鉄直結の大学なんですね。アクセスも良いし。その前に札幌大学さんとかがやっておられて、次は北海学園って言っていただいて。

杉山さんだったかな？言っていただいて、気軽に「あっ良いですよ」って言ったんですよ。ところが意外と事務局に行きましたら、結構な抵抗にあいましてね。

加納：あー、そうですね？

樽見：そんな大変なことをいっぱいやるなってね。暗に言ってるんです、顔がね。

加納/岡野：ほう。うーん。

樽見：どうしてそんなのを引き受けてきたのって顔してるんですよ。ほうぼうでハンコついてもらうのに大変な思いして。

加納/岡野：へー。

樽見：そして第一回の北海学園での大会をやったんです。

そしたら、やっぱり結局やってよかったなあっていうふうに思ったのは、僕一人じゃないってことは確信してますね。

加納：ああ、そうですね？

樽見：やってみないと、やっぱりわからないですよな。

加納：うーん。まあ、そういう裏側のことは僕らはわからない。本当に学生さんが楽しそう一緒にあって関わってくださったのが印象的で。

何年か続けてやらせていただきましたからね。

樽見：はいはい。

岡野：やはりそれは障がい者ということで、ちょっと抵抗があったんでしょうかね？

樽見：いや、障がい者っていうか、そのまず学外にあまり開いていなかったこともあるし。加えて、いろんな体の状況だとか。どんな対応していいか全くわからなかったんじゃないでしょうかね。

今はもう普通に学内ではね、障がい学生がやっていますけど。それもね、その最初 2000 年当時、2002 年でしたか？ああゆうことがあったことが一つのきっかけと言うか、練習になっていると思うんですね。

加納/岡野：うーん。なるほどね。

樽見：そういう意味では、すごく良い。我々にとっても思い出深い会でしたね。

加納：ああ、そうですか。その当時は我々の自前で、そういう場所を持つっていうのがまだできないような状況でしたから、大学っていう場所がね。

なんと言うか、勉強するにはね、やっぱり一番の良い会議室っていうんじゃないくて。

大学の教室っていいですよ？あの匂いが良いっていうか。

樽見：そうですね。

加納：ありがとうございます。それで樽見さんは NPO 学会っていうのは今一生懸命ずっとやっておられると思うんですけど。

樽見：いや今僕、一応、会長なんですよ。

岡野：おお。

加納：おお、学会の会長なんですか？おお、すごい。

樽見：そうですね。ちょうど NPO 学会できたときが 99 年。最初から参加しています。

岡野：ちょうど北海道に来られた時に。

樽見：はい。私たちはですね、僕はアメリカの大学院出てるんですけど。帰ってきて NPO

学ってまったく学問領域には無いんですよ。

仕方がないので、新橋のあるスペースを借りてくれた先生がいて。その先生の所に夜な夜な集まっては、NPO という新しい潮流があると。それをいろんなアプローチから。僕は政治学ってアプローチなんですけども、社会学だとか、経済学だとか、福祉学だとか。そういうアプローチから集まりたいって人達が、ほんとうに三三五五集まって。研究会をやっていたのが二十数年前なんです。私東京に居ましたけど。そして同じようなことをやっている大阪のグループがいて、一緒になって作ったのが NPO 学会なんですよ。

加納：ああ、そうでなんですか。

樽見：で、一時は一千数百人、今でも一千人ぐらいメンバーがいるっていう。非常に何ていうのかなあ。これをプロパーにしているというよりは、これもこう、二股かけてる人達がたくさんいるんですけども。色んなアプローチの先生たちがいて。実践化も行なっていて、面白いなあと思っていて、気が付いたら二十年ですよ。

加納：ああ、なるほどね。

札幌チャレンジドは 2000 年に出来て、我々、元々は障がいのある方の働く支援とか社会参加を IT でやろうっていった時に、いわゆる無償のボランティアでやるのではなくて、有償ボランティアであり。組織としては事業を興しながら、社会の課題を解決したいってことで。事業型 NPO を目指していたので。

すぐに NPO の申請をして、翌年には NPO 法人になっていたんですね。で今は 16 年丸々経ちまして。2015 年度は、昨年度決算が終わって、ついに売上げが 1 億円を超えたんですね。

樽見：すごいね、それは。

加納：1 億を超えるためにやってきたわけではないんですけど。本当に毎年毎年、少しずつ、少しずつ 15 年かけて 1 億円まで来て。1 億円分の社会貢献をできる団体に成れたのかなあというふうに思っています。

一億という数字をどう捉えるかなんですけど。まあ、こんな状況なんですけど。樽見さんは NPO 学会で、それこそいろんな NPO ですね。

見たり聞いたりされていると思うんですけど。札幌の NPO とか、札幌チャレンジドはどうなんでしょうね、そういう目から見られて。

樽見：あのう、加納さんも岡野さんもお存じだと思うんですけども。

海外からも注目されてるような団体が北海道にあるんですよ。

全国から考えても、面白いな、すごい新しいなっていう団体が札幌にはある。

それ、実は20年前も今も変わらなくてね。

20年ぐらい前によく僕の研究者仲間が、お前いいなあって。そんな先進事例？

が沢山ある所に住んでていいなあって言われたものですけども。

今でも実は、その実態はあんまり変わらなくて。結構その、とんがったというか、新しい試みをやっている団体がある。

やっぱり3つ。代表的なものは、1つはやっぱり、ねおす。

だとか、それから北海道グリーンファンド。

それから札幌チャレンジドだと思うんですよ。

加納：ああ。

樽見：そういう意味では、是非フロントランナーというか、フロントラインに居続けていた  
だきたいなあと。

もう、反面ね、やっぱり後続く団体が意外と最近、無いんじゃないかなあって気がしなく  
もない。

加納：あのう、NPOで飯を食いたいとかね、そういう社会の役に立つことを仕事にしてい  
きたいって人は増えているんですけども。

おっしゃっているように、新しい団体、そういう人がポンと団体作るっていうのは、北海道  
はだいたい少ないですね。東京の方が、ひょっとしたら、今はそういうのが盛んなのかなあ  
って。

まあ、NPO法人に限らずかもしれないですけどね。ソーシャルビジネスみたいな形で。

樽見：そう。だから、おっしゃったようにソーシャルビジネスという観点から考えれば。  
別にNPOではなくてもいいわけですよ。

営利を追及しながら、同時に社会性を追いかけるっていうのもいいし。それから最近かっこ  
いい言い方で、ハイブリットって言われますけども、両方・両輪で営利と非営利の両方の仕  
組みを持ちながら。

その時々で良い方を選んでいくっていうやり方もあるし。そういう意味でもいろんな生き  
方あるんだけど、やっぱりまさに加納さんの世界が一巡してきて。

樽見：その後続く新しいブレイクスルーなやり方っていうのがない。

だからもう一つやっぱり残念ながら、ちゃんと食べれないっていうか。

樽見：生活をここでやっていくのは厳しいっていうことを身に染みて感じているので。

起業までしなくたって、加納さん達みたいに先に開いた人達ところのその神輿に担がれようかなあっていう人達がまだまだ多いってということかもしれませんね。

加納：まあ、そうですね。そういう意味ではやっぱり、リスクっていうかね。いきなりそれで飯が食えるかっていうと。

札チャレは、まあそういう意味では、お陰様で何とかなってきた、今は職員が私入れて 11 人。

樽見：それがすごいですよね。

加納：障がい者の人も雇用契約している人が 23 名おられますから。

まあ、よくそここまで来たなあという感じはありますけどね。

樽見：うん。

加納：そうですか、ありがとうございます。あっという間にですね、前半の 10 分が経ちましたので。ここでちょっと休憩にさせていただきます。

《樽見さんのリクエスト曲、スピッツの「稲穂」》

加納：はい、それでは、引き続き、北海学園法学部の樽見先生とのお話しをしていきたいと思えます。

加納：樽見先生は、北海学園大学で。

樽見：樽見さんと呼んでください。

加納：樽見さんで。あはは。

樽見/岡野：あはは。

加納：わかりました。樽見さんは北海学園大学で、法学部カフェという。

面白いものをやられておられます。私も以前、一度出させていただいたことがあるんです

けども。

樽見：ああ、そうですか。ありがとうございます、どうも。

加納：法学部カフェとは、何ぞや？ということ、まずちょっと最初にお聞かせいただけますか？

樽井：はい。まあ、カフェと称しながら、やっぱり一種のディスカッションの場なんですよ。かといって討論会だとか、あるいは座談会だとか、あるいは講演会だとか。ていうのは堅苦しいんで。

カフェっていう名前にしたと。こういうのも前例がありまして、世界的にね。哲学カフェとか、サイエンスカフェっていう。

加納：あっ、サイエンスカフェって何か聞いたことがありますね。

樽見：やっぱり哲学だとか、科学っていうと非常に難しいじゃないですか。それはお茶飲みながら、いわゆるカフェ・喫茶店で話をするように。お互い情報交換し合おうというのがカフェ、ですね。

それに乗かってですね、今から5年ほど前に法学部の中でも、法学部カフェっていうのをやろうと。

で、これ何で「法学カフェ」じゃないのかと。私は法学部っていう所にいるんですけど。

「法学カフェ」じゃないのかと言われるんですけど。

法学部っていう学部なんですけど、いろんな先生達がいるし。学生もいろんな興味をもっている学生がいるし。あらゆるテーマを全部含めて、ここでやると。

そのためには、「法学カフェ」だと法学だけになってしまうですね。

加納：ああ、なるほど「法学部」ってところに、ああ。

樽見：部ってのは、そこなんです。で、法学部というのは、ファカルティーオブロウっていうんですけども。

ファカルティーオブロウ カフェにしようっていう若い人達がいるんだけど。ここは泥臭く法学部カフェっていう方がいいって。うふふ。

加納/岡野：あはは。へー。

樽見：と言って続けて5年っていう。で40回ぐらい、今やっているという状況ですね。



加納：樽見さんがカフェの店長という肩書だったので、あはは。

樽見：店長、はいはい。そうですよ。店長っていうのが良いんですよ。

加納：良いですね、店長っていうのが。

樽見：店長っていう響きがね、良いですよ。いろんな発信するときにね。学内的にも、店長の樽見ですっていうだけで、何となく、ふざけるなお前って感じで。うふふ。

加納/岡野：あはは。

加納：いいですね。その緩さ加減がね、良いですね。  
何でこうゆうことを始めようと思われたんですかね？

樽見：いくつか理由があるんですけど。一番大きな理由はね、間接的というか、背景としては、学校、あるいは大学っていうところが、あまりにも無駄が無さ過ぎてね。学生もそうですけども、教員もやるべきことをやったら、さっさと居なくなる。ご存じかもしれないですけど北海学園っていうのは地下鉄直結の大学なんですよ。すごい便利なんですけど、便利が故にですね。用事が無くなったら、さっさとみんな居なくなるっていうね。

加納/岡野：ああ、なるほどね。うふふ。

樽見：学生も最近、結構みんな真面目でしてね。就職もあるんで出席するんだけど、授業が終わったら帰る。教員も授業の時だけ来てですね。終わったらさっさと、すすきの行って飲む。そういう状況が面白くないなあと。

それから壁もね、今最近のはすごく綺麗で、ちょっと変なチラシなんかだと、すぐひっぺがされてしまうんですね。そうじゃなくて昔の大学っていうのは、すごく猥雑で。トイレなんかも落書きがいっぱいあったりね。チラシが貼ってあって、その上からまたチラシが貼ってあって、何重にもチラシが貼ってある中から自分の情報をゲットして。そしてそこに自分が出会いがしらの情報に有り付いていくっていうのが大学だったんですね。

そういう意味で、こっちからは余計なお世話なんだけど、いろんなテーマをもっと差し出して上げて。アンテナ張り巡らしてる学生は若いですよ。その直観というか触手というか。パッと捕まったところにみんな来てもらう？

そこからまた新しいテーマが広がっていく？それが別に、私は政治学の教員ですけども、政治学じゃなくてもいいし。法律学でなくてもいい。そういう感触ですかね？

だからもう一つの直接な理由は、丁度ですね、私、法学部長という学部長になった時に始めたんですけど。4月になる直前に、あの東日本大震災が起きて。やはり放射能の問題を考えるべき時だとか。あるいは被災者をどうゆうふうに支援していくかってことを考える機会にしよう。

ちょうど札幌では、上田前市長が市電のループ化なんて、おっしゃっておられて。じゃ、ループ化の問題も、みんなで一緒に考えようっていうことで。

第一回は、上田市長がゲストだったんですね。

加納：あっ、そうですか。へー。

岡野：はあー。

樽見：そういうことで始めました。

加納：そんな法学部カフェに、ちょっとお声掛けをいただいて、札幌チャレンジも一緒に。

樽見：どうもありがとうございます。お世話になります。

加納：今度、7月2日にやらせていただくことで。

テーマが「合理的配慮な社会って何だ？」っていうことでやらせていただくんですけど。ちょっと登壇するっ、ああ、まずはその、こうゆうテーマでやられるっていうお考えのところと。あと、登壇者のご紹介をしていただければと思うんですけど。

樽見：合理的配慮って言葉は、私は知らなかったんですね。

何となく名前は知っていました。名称は知っていたんですけども、これほどリアルに合理的配慮のことを考えたことは無かったんですね。

たまたま今回話して、二人いまして。一人は私の同僚である法学部、北海学園法学の教員である中條美和っていう教員が一人。第一話手として参加します。

そして第二の話手が加納さんなんですよ。NPO 法人札幌チャレンジの代表として参加していただきます。

中條美和っていうのは、聴覚に重度の障がいがあって。昨年、我々の大学に入ってきたばかりなんですけれど。非常に頭脳明晰で。非常にしゃべりもうまいんですよ、実はウィットもあって、面白いんです。

ただ話すときに常に私の口元見て話していただかないと、会話が通じません。

まったく聞こえていないのか。あるいはちょっとしか聞こえていないのか、よくわかりませんけれども。普通の会話は成立しないです。ただ唇を見るとね、唇を彼女は見事に読んで。

私の言わんとするところのほとんどを理解する。

樽見：そうゆう彼女をその所謂、教授会って組織に迎えたときに。

我々はとまどいがある。どうゆうふうに彼女を迎えたらいいのかっていうことで。

いろんな思考錯誤を、今もしているし。多分彼女にとっては、まだまだ足りないんですよ。

その思考錯誤が実は配慮なんですけども。その配慮が合理的じゃなきゃいけないって新しい考え方に僕はすごく、コミットっていうか。これは面白い考え方。

それは即ち、僕なりに解釈すればね。無理のない範囲で、障がいのある人と無い人達と同じ職場で働いて。同じ人生を歩んでいくっていう考え方ですよ。

無理のない範囲で、自分に出来得る限りでっていうのは合理的な。

必要にして十分な、不可欠な配慮をしていくっていう考え方、面白いと思ひまして。

彼女は東京大学を出ているんですが。その後にアメリカに留学していて。アメリカで長く経験しています。大学ってところで経験しているんですね。

アメリカの大学の合理的な配慮と、日本の大学、とりわけ私達のような北海道にある大学の合理的な配慮っていうのは、どうゆう違いがある。

私たちはアメリカから何を学ばなきゃいけないのかっていうところ辺りを。

まず頭出ししてもらって。それから障がい者の就労支援っていうことで長い経験をされている加納さんに。そこのヒントにね。話を膨らましていただきたいなあって思っているんですね。

加納：はい、なるほど。わかりました。岡野さんね。

岡野：はい。

加納：うちでもね、いろいろ合理的配慮に該当しそうなことは一生懸命考えて、やっています。

岡野：我々なりにいろいろ考えているんですけど。やはり合理的配慮となると、障がい種別ってことじゃなくて、個々に対しての配慮なんですよ。

個人の配慮。だからいろいろ難しいというか、同じ障がいを持っておられる方なんですけど、その方に対しての配慮の方法が異なったりとか。

そうゆうのがあって。今回このカフェでいろいろ、そうゆうご意見というか、皆さん方の意見だとか。

樽見：うーん。

加納：あ、う、他にもゲストの先生がお二人おられるので。

樽見：そうなんですよ。

加納：その方も、是非ね、出来るだけディスカッションに入ってください。

樽見：二人はね、法律の専門家で新しい障がい者に関わる法律？  
障がい者差別解消法とか。改正障がい者雇用促進法といった法律の専門家なんですよ。この二人達には後半のディスカッションのところで関わっていただいて。中條さんと加納さんの議論に、ささり込んでもらう。

加納：なるほどね。今日は本当にプチ告知ということで。時間がもっとたくさんあれば、もう少し突っ込んで、いろいろ話も。

樽見：因みに7月2日です、はい。

加納：はい、7月2日、土曜日、午後2時30分から4時30分まで。  
北海学園大学豊平キャンパス。あの豊平の地下鉄のある所の、7号館2階、D-20教室ということで。

どなたでもご参加いただけますし、入場無料で事前申し込みも、不要ということで。もし何か、お問い合わせがあればですね、北海学園大学法学部の、法学部事務室ということで、電話が841の1161まで、お問い合わせいただければいい、ということと。あとは中條さんが聴覚障がいの方ということで。今回は手話通訳と要約筆記と、両方付いて、まさに合理的配慮。そういう所からもしっかりやりながら、進めようということですね。

樽見：あのう、情報補助というですかね。  
どうやってみんなが同じような情報を共有できるかってことを作り出すのを合理的配慮の重要なテーマかなあっていうふうに思って。結果、うまくいくかどうかはわかりませんけど。

加納：札幌チャレンジドには視覚障がいの方の通ってきているので。  
今、ちょっと何とか都合つけてですね。目の不自由な方にも来てもらって。

樽見：なるほど。

加納：いろんな障がいの方が混ざり合いながらですね、この合理的配慮について考えていきたいなあと思っておりますんで、是非7月2日、よろしくお願い致します。

樽見：よろしくお願いします。

岡野：よろしくお願いします。

加納：今日はお忙しい中、お出でいただきまして、どうもありがとうございます。

樽見：どうもありがとうございました。

岡野：ありがとうございました。

—【生放送】—

加納：はい、北海学園大学、樽見弘紀さんとのお話を聞いていただきました。今日は収録だったので、私たちはもうエンディングのあいさつということで。岡野さん、この法学部カフェ、楽しみですよ。

岡野：そうですね。もう7月2日、まだ先かと思っていたんですけど、もうすぐですね。

加納：是非一人でも多くの方にご参加いただければと思います。来週もまた月曜日午後3時、札幌チャラジオ通信でお会いしましょう。それではありがとうございました。

岡野：ありがとうございました。

加納：さようなら